近世後期相州三浦半島地域における熊本藩の海防警備記録について

―資料群「右田藤左衛門文書」の紹介を中心に―

近藤　絢音

はじめに

近世幕末において、19世紀頃から日本へはロシアや西洋諸国、アメリカといった従来まで交易を行ってこなかった国々からの異国船の来航が盛んとなった。相州（相模国）沿岸も例外ではなく、文政元（1818）年５月14日のイギリス商船ブラザーズ号の浦賀への来航を早い事例として、それ以降も文政５（1822）年にはイギリス捕鯨船のサラセン号の浦賀来航、弘化３（1846）年アメリカ東インド艦隊司令長官のビッドルによる浦賀来航、そして嘉永６（1853）年ペリーの浦賀来航といったように、頻繁に異国船が来航するようになった。

異国船来航を受け、相州沿岸においても海防警備の体制が整えられていった。三浦半島においては、文政３（1820）年から川越藩の預所が配置、同４年には小田原藩の預所が配置された。天保13（1842）年からは三浦半島全域に川越藩の預所が配置されるようになる。さらに弘化３年ビッドルの浦賀来航を契機として彦根藩の預所も配置された。

このように三浦半島において諸藩による警備体制が敷かれていくなかで、嘉永６年から熊本藩が相州・三浦半島地域の海防体制へ関わることとなる。熊本藩による相州海防警備に関しては、伊藤好一氏による武蔵国多摩郡に焦点を当てた熊本藩の預所支配についての研究(1) を始めとして、浅倉有子氏による熊本藩預所支配の実態を解明する研究(2)、神谷大介氏による相州台場における熊本藩の軍備の実態および三浦郡の村々取締役頭取・改革大組合惣代をつとめていた永嶋家と熊本藩を含む諸藩との関与の実態に関する研究(3)、柴田愛氏による熊本藩下級藩士による江戸・浦賀での情報収集に関する研究(4) などがある。先行研究による分析を通じて、相州警備にあたって

の熊本藩による預所支配の様相や当地での警備状況などが具体的に解明されてきていると言える。

熊本藩の相州海防警備に関わる資料群として、神奈川県立公文書館(以下、当館) 所蔵の資料「右田藤左衛門文書」(資料群 ID：9200430028) という資料群がある。当資料群は全36点から成り、主に熊本藩が海防を管轄していた相模国の海防拠点の一つである鴨居陣屋から国元に在住していたと推測される右田藤左衛門という人物へ宛てて送られた書簡を主とする資料群である。昭和40(1965) 年に神奈川県立図書館によって古書店から購入され、その後当館へ引き継がれたが、資料群の詳細については未検討のまま現在に至っている。本稿では当資料群の資料構成とその内容を分析し、特徴を紹介していきたい。

1　熊本藩の相州海岸警備

まず「右田藤左衛門文書」の内容を紹介する前提として、幕末期における熊本藩の相州海防警備について、おおまかな経緯を概観していきたい[(5)]。

「はじめに」で述べたように、熊本藩が相州の海防警備へ関わるようになったのは、嘉永６年からである。６月３日に発生したペリーの浦賀来航を受けて、熊本藩へ６月７日から武蔵国本牧の警備の命が下され、計604名の兵が派遣された。当該の出兵は緊急の対応であり、またペリーは６月12日に浦賀から引き揚げたため、本牧における警備も６月15日には撤収となり、短期間の出兵であった。その後同年８月５日に熊本藩政府から家老･老中連名で、熊本藩は国元の警備に尽力する必要があり関東への派兵は出費なども嵩むため関東の警備は関東で受け持つべきであるとの旨を江戸家老へ通知するなど、さらなる関東への派兵について熊本藩は当初消極的な姿勢であった。しかし、同年11月になると相州を含む江戸湾沿岸の海防警備体制が大きく変更され、相州沿岸の警備は従来担当していた川越藩・彦根藩から熊本藩・萩藩へと交代され、安房・房総地域の警備も忍藩・会津藩から代わって岡山藩・柳河藩が担当することとなった。

警備派遣の要請を受けて、翌嘉永７(1854) 年２月頃までに熊本藩の兵が江戸へ到着した。川越藩との交代は、川越藩の担当となっていた台場の建設の遅れなどを要因としてすぐには行われず、３月15日に警備担当区域が熊本藩の管轄へ移され、さらに４月１日に砲台・台場の引き渡しが完了した。

熊本藩の管轄となった台場は、猿島・観音崎・亀ヶ崎・鳥ヶ崎・十石崎・籏山の６箇所(全て現在の横須賀市)である。警備地の陣屋は大津・鴨居の２箇所であり、藩兵が駐在した。台場・陣屋に加えて、相模国三浦郡内の17ヶ村、鎌倉郡内の21ヶ村、武蔵国久良岐郡内の４ヶ村を嘉永６年12月から幕府より預所として付与されていた。預所は付与された以降も熊本藩から繰り返し加増が要請され、安政６(1859) 年には付与当初の2.3倍の石高となっていた。

以上のように開始された熊本藩による相州海防警備は、最終的には文久３(1863) 年まで10年間に渡って続けられた。文久３年に公武周旋のための召命内勅を受けた熊本藩主細川慶順が入京し、京都警備を命じられたことを契機として相州警備の解任を幕府へ願い出た。その後、同年５月25日に交代先として佐倉藩に相州警備が命じられ、同年７月６日に現地の引き渡しまで完了し、熊本藩による相州警備は終了した。

以上、熊本藩の相州警備についてその流れを確認した。それでは、相州警備の流れの中で、「右田藤左衛門文書」の作成された時期等は具体的にいつごろと推定されるのか、またどういった内容で構成されているのか、詳細を見ていきたい。

２　「右田藤左衛門文書」の構成と作成者および受取人

①資料群の構成と右田藤左衛門について

「右田藤左衛門文書」の内容・差出人・作成者・宛先・作成日についてまとめた【表１】の通り、「右田藤左衛門文書」は、全36点で構成されている。そのうちの34点は書簡・依頼状が占め、残りの２点のうち、「御達之写」(資料 ID：2200431261) は、浦賀奉行から達せられた御備場 (海防警備のための

台場・砲台など）での心得を熊本藩江戸留守居の青地源右衛門らが写した写し書き、「〔 観音崎御陣屋組合姓名書上〕」（資料 ID：2200431288）は、鴨居陣屋(6) に在勤していた人物の姓名一覧である。

資料群の大半を占める書簡類34点のうち、「観音崎陣屋より書状」（資料 ID：2200431253）は人馬所役人中へ宛てた人馬の徴発依頼状であるが、他33点はすべて江戸屋敷もしくは鴨居陣屋から、右田藤左衛門もしくは右田藤左衛門取次衆へ宛てて送られた書簡となっている。

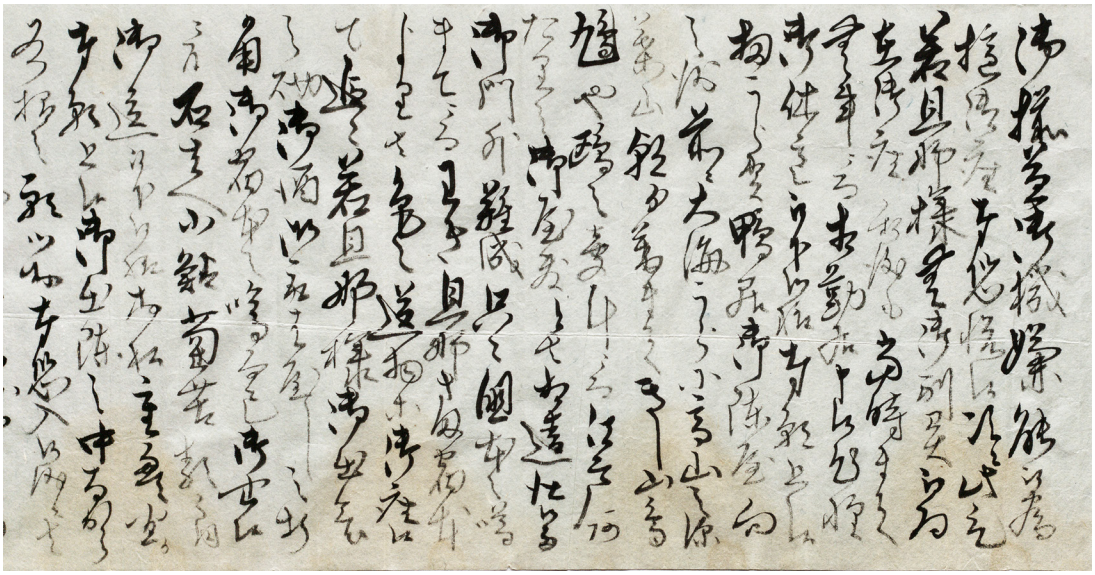
【表１】「右田藤左衛門文書」の内容・作成・宛先・作成日

No.	内容	差出人・作成者	宛先	作成	資料 ID
1	観音崎陣屋より書状　熊彦より野津原から大津までの人馬徴発依頼	右田熊彦	人馬所　役人中	１月20日	2200431253
2	若旦那様白金屋敷到着の報告	白金　源三郎	右田様御内　御取次衆	２月５日	2200431254
3	木挽町および八丁堀御屋敷へ引移の件	八丁堀御屋敷　斎藤豊太郎	右田藤左衛門	３月３日	2200431280
4	近況報告、最近は殿様の浦賀出陣なし	木挽町　源三郎	右田様御内　御家来衆	３月３日	2200431255
5	旧蝋出立の際の見送りの礼状	八丁堀御屋敷　服部寛太	右田藤左衛門	３月13日	2200431281
6	来る24日小兵衛小峯山において略調練	南新五郎　他1名	藤左衛門	３月16日	2200431282
7	4月1日御備場引き渡しについて	相州観音崎御屋敷　永山鬱平	隈府　右田藤左衛門	４月４日	2200431256
8	若旦那様浦賀へ出陣	浦賀鴨井陣屋　源三郎	右田様　御取次衆	４月６日	2200431257
9	若旦那様近況、アメリカ船5艘渡来	浦賀鴨井陣屋　源三郎	右田様御内　御取次衆	５月６日	2200431258
10	観音崎陣屋備場にて陣屋詰の件	服部寛太	右田藤左衛門	５月12日	2200431259
11	近況報告、変化なし	鴨居陣屋　右田格助・右田大四郎・右田正三郎	右田藤左衛門	６月６日	2200431260
12	異国船観音崎へ乗り入れの件	右田熊彦	右田藤左衛門	６月21日	2200431262
13	先生はじめ皆々変わりなし、此表異船渡来	相州　斎藤豊太郎	右田藤左衛門 他1名	７月３日	2200431283
14	先日アメリカ船渡来につき大騒動、熊彦様近況	三浦郡鴨居村観音崎御陣屋　永山鬱平	右田藤左衛門	７月４日	2200431263
15	近況報告、先月17日の異国船渡来以降変化なし	右田大四郎・右田正三郎・右田格助	藤左衛門	７月５日	2200431264
16	若旦那様近況の報告	観音崎陣屋　源三郎	右田様御内　御取次衆	７月６日	2200431265

No.	内容	差出人・作成者	宛先	作成	資料 ID
17	若旦那様変わりなし、扶持の渡し方について	浦賀鴨居村御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	7月6日	2200431284
18	熊彦様近況、先月異船渡来日本人漂流者を連れ浦賀へ	観音崎御陣屋　服部寛太	右田藤左衛門	7月7日	2200431285
19	熊彦の報告、旦那様江の島参詣につき	観音崎陣屋　源三郎	右田様御内　御取次衆	7月20日	2200431266
20	熊彦様の近況	右田格助	右田藤左衛門	7月21日	2200431267
21	アメリカ船到来なし、江の島参詣は若旦那様不快のため取りやめ	浦賀鴨居御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	7月21日	2200431286
22	若旦那様帰国の沙汰いまだなし	相州観音崎御御陣屋　源三郎	右田様御内　御取次衆	8月21日	2200431268
23	観音崎の気温について、御備場詰交替の件	斎藤豊太郎	右田藤左衛門	8月17日	2200431269
24	近々異船参る備えにつき状況報告	大嶋久平	右田藤左衛門	9月5日	2200431270
25	米船再渡来風聞につき世上報告	相州浦賀郡観音崎御陣屋源三郎	右田様御内　御取次衆	9月6日	2200431271
26	若旦那様帰国日限達しなし	観音崎御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	9月21日	2200431272
27	当地漁業など近況・情景報告	相州観音崎御陣屋　永山鸞平	右田藤左衛門	10月5日	2200431273
28	若旦那様帰国の節伊勢参拝などするので延引の件	観音崎御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	10月6日	2200431274
29	熊彦近況	相州観音崎　大嶋久平	右田藤左衛門	10月13日	2200431287
30	大坂表渡来のロシア船下田へ迫る通達あり、国許から交代人が来次第交替するべく	右田熊彦	右田藤左衛門／父上	10月21日	2200431275
31	皆で風雨の中鎌倉へ行ったことの報告	観音崎御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	10月21日	2200431276
32	若旦那様帰国は交替未到着のため未定、荷物と今後の予定につき	相州観音崎御陣屋　源三郎	右田藤左衛門様御内　御取次衆	11月6日	2200431277
33	大坂より書状　大坂御屋敷御着、帰国船旅の経過につき	右田熊彦内　源三郎	右田様御内　御家来衆	1月15日	2200431278
34	大坂から出発、今後の帰国旅程について	右田熊彦	右田藤左衛門	1月20日	2200431279
35	御備場詰之面々心得方　達之写し	青地源右衛門・高本敬太郎	–	6月8日	2200431261
36	観音崎御陣屋組合姓名書上	–	–		2200431288

主な宛て先となっている右田藤左衛門(以下、藤左衛門)とはどのような人物であったか。まず『熊本藩侍帳集成』所収の「御侍帳」(7) において「右田藤左衛門」の名前を確認することができ、そこでは「御番方五番・沢村八之進組　三百石」と表記されている。当該の人物が書簡の宛て先の「右田藤左衛

門」と同一人物であるとするならば、藤左衛門は熊本藩において番方役人をつとめていた人物であることが分かる。藤左衛門の名前はそのほかにも、熊本県立図書館所蔵富永家文書資料の慶応２(1866) 年作成「槍術着到」(8) という槍術稽古に関する記録資料に「富田十郎右衛門門下」として藤左衛門の名前が確認できる。富田十郎右衛門という人物は、熊本藩家臣で文政11(1828) 年から槍術師範役を仰せ付けられている(9)。さらに同じく富永家文書の資料で嘉永６年９月11日作成の「若殿様御覧槍術組合附」(10) においても藤左衛門の名前を確認することができ、そのほか、「右田藤左衛門文書」の書簡差出人としていくつか名前が確認できる右田格助という人物についても、富永家文書の槍術稽古関係資料に名前が散見される。また、詳細は後述するが、「右田藤左衛門文書」の資料群が作成された時期は嘉永７年頃と推測される。これらの点から、藤左衛門は熊本藩において番方に属した家臣であり、特に槍術の門下にあった人物であると推測される。



「観音崎陣屋より書状」（資料 ID：2200431258）

②資料群の作成時期

文書群の資料のうち陣屋組合の姓名書上を除く35点には全て作成日が記載されているが、日付のみの記載であり、元号は記されていない。ただし書簡

類の内容から作成された年代を推定することができる。

藤左衛門宛ての書簡としては、まず【表１】No. ２の白金屋敷の源三郎から藤左衛門へ宛てた２月５日の書簡があり、「若旦那様」が無事に江戸の白金屋敷（江戸白金に所在した熊本藩下屋敷か）へ到着したことを報告している。その後No. ３の斎藤豊太郎から藤左衛門へ宛てた３月３日付の書簡では一行が白金屋敷から木挽町（木挽町の熊本藩屋敷か）および八丁堀（八丁堀の熊本藩屋敷か）へ移ることを仰せつけられた旨が報告されている。熊本藩から藩士が初めて派遣された嘉永７年には、１月28日～２月１日にかけて藩兵らが江戸へ到着したとされており(11)、書簡による一連の動向と一致している。続いて、No. ７の永山靏平から藤左衛門宛ての４月４日の書簡では４月１日に御備場の引き渡しがあったとの報告があり、当記述も嘉永７年４月１日に川越藩から熊本藩へ相州の台場や陣屋の引き渡しがあった事実と一致している。

その後の書簡内容についても、No. ９の５月６日付けアメリカ船5艘の来航に関する書簡は、嘉永７年５月１日に浦賀奉行から熊本藩江戸留守居へ近日中にアメリカ船5艘が下田へ来航する旨が通知された件(12)を指していると考えられ、No.12～14の異国船来航報告は６月17日にアメリカ船が漂流民を乗せて小柴沖へ来航した件(13)と一致している。

また日付順に見た際の内容の流れとして、（１）１月～３月頃：江戸への到着報告→（２）３月～11月頃：現地の近況報告、異国船の来航について、御備場の番の交代時期について→（３）10月～11月頃：御備場の番の交代や帰国予定について→（４）１月頃:帰国旅程の報告といった内容で推移している。

書簡以外の資料に関しても、No. １の１月20日付け人馬徴発依頼状は、江戸への藩士派遣に際してのものと推測され、No.35の６月８日付け作成御備場詰めにあたっての心得写し書きも嘉永6年4月の御備場交代前に熊本藩から幕府へ警備の心得方を上申している記録(14)と関連があると思われる。

このような点から、当資料群は熊本藩から相州へ海防警備のために藩士派遣が行われた初年度である嘉永７年（安政元年）～安政２年にかけて作成さ

れたものであることが分かる。

③差出所および差出人

【表２】

先生
右田尊次
田中権作
矢野新兵衛
広田久右衛門
永松猪十郎
松野多十郎
山川亀三郎
坂本十郎右衛門
坂本嘉八郎
手嶋権蔵
上妻三左衛門
上妻半之元
柴山弥十郎
内藤大太
右田熊彦
右田格助
右田玉三郎
右田大四郎
大黒左衛門
小野曽八
高橋弥平
緒方在助
塩山又次郎
鳥居熊雄
永山靏平
永山多嘉喜
斎藤豊太郎
服部寛太
渡邊準作
野村鐘尾
吉本直太郎
嶺野亀喜
桜田弥次右衛門
金森二郎彦
大賀勝之元

書簡類は主に鴨居陣屋から差し出されているものが多いが、一部差出所が異なるものもあり、差出人にも複数の人物名が確認できる。

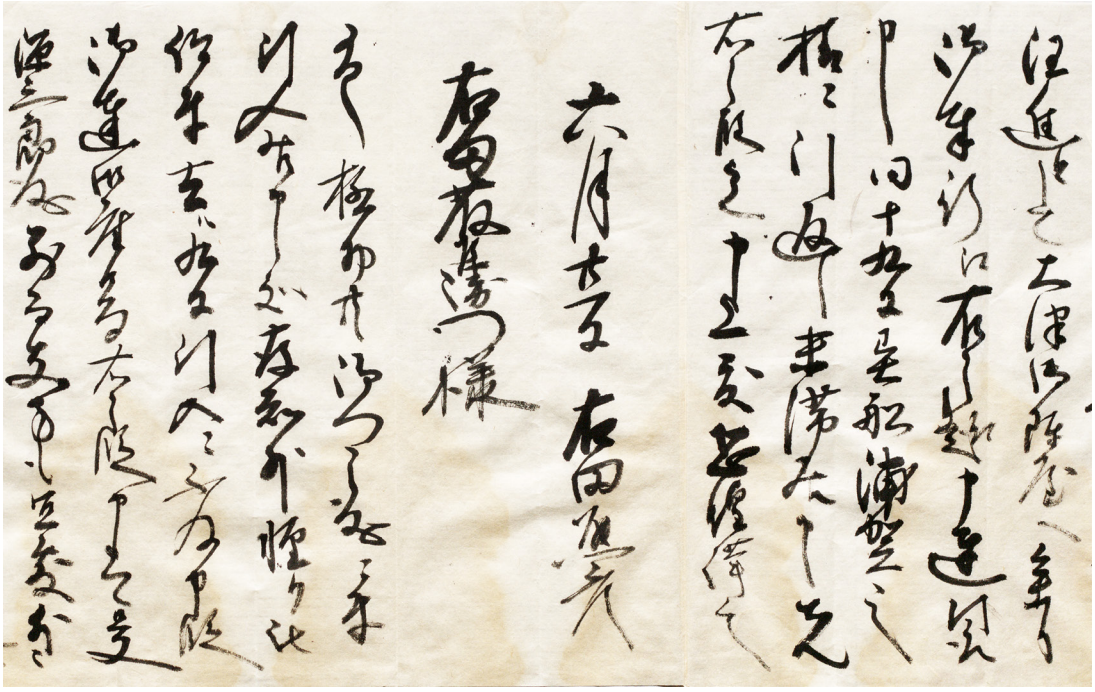
まず、差出所として、No. ２～５は白金・木挽町・八丁堀の熊本藩屋敷から送付されていた。その後、御備場の引き渡しが完了した４月以降からは、差出所は、記載があるものはほぼ鴨居陣屋(「観音崎御陣屋」とも表記されている）からとなっており、書簡を作成していた一行については、派遣当初は江戸に駐在したものの、御備場引き渡し以降は鴨居・観音崎を拠点として駐在していたと考えられる。

差出人としては複数名の人物が確認できるが、決まった人物が複数回書簡を作成している。書簡送付日は、毎月３日～６日あたりおよび20日～21日あたりに集中しており、毎月月初めと月末に定例的に報告として書簡を作成していたようである。

各人物別の書簡点数は、「源三郎」が15点、「右田熊彦」が４点、「斎藤豊太郎」が３点、「服部寛太」が３点、「永山靏平」が３点、「右田格助」が３点、「右田大四郎」が２点、「右田正三郎」が２点、「大嶋久平」が２点であった。【表２】は「〔観音崎御陣屋組合姓名書上〕」を元に、鴨居陣屋へ駐在していたと思われる人員を原資料の掲載順に一覧にしたものである。「源三郎」・「大嶋久平」を除く書簡の差出人は全て当該の姓名書上に名前が掲載されており、また、姓名書上のうちの「先生」がおそらく

源三郎を指していると推測される。

各人物の詳細であるが、まず書簡宛先の藤左衛門の親族として右田熊彦および右田格助がそれに該当する。熊彦は書簡を多く書いているが、特に【表１】No.30の藤左衛門宛て書簡にて、端裏書に「父上様」の記載があり、藤左衛門の子息に当たる人物であることが分かる。格助は、藤左衛門との正確な親族関係は当資料群から確認することができないが、「〔観音崎御陣屋組合姓名書上〕」に熊彦に列して記載されている点や、前に述べたように富永家文書の槍術稽古関係資料に藤左衛門と列して名前が確認できる点などからおそらく親戚関係に当たる人物と思われる。また同じく「右田」姓の大四郎および正三郎も親戚に当たる可能性がある。



書簡作成者「右田熊彦」の記名

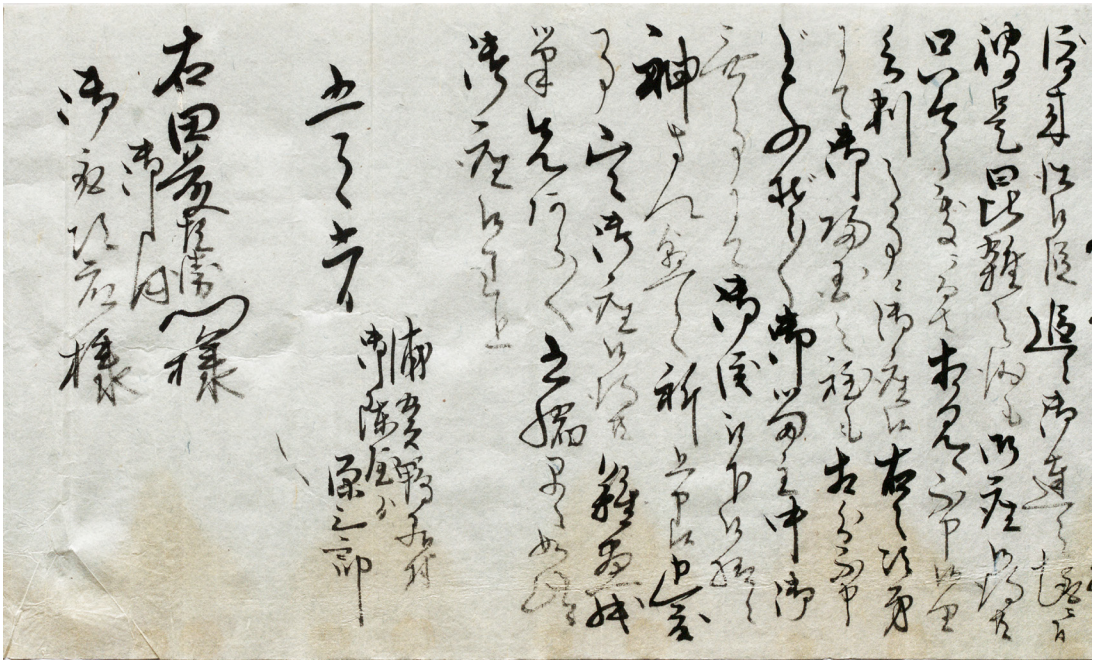
（「異国船観音崎へ乗り入れの件」（資料 ID：2200431262））

書簡の点数が一番多い源三郎は、熊本藩からの相州派遣の際に総帥を任じられていた長岡監物（通称源三郎）の可能性があるかと推測される。藤左衛門との関係背景は不明であるが、長岡監物は嘉永７年１月から江戸へ派遣され

ており、源三郎からの書簡の送付時期と時期を同じくしている点、および「〔観音崎御陣屋組合姓名書上〕」にて「先生」として一番冒頭に記載されているのがおそらく源三郎であり、高位の人物として扱われている点から、当時長岡は総帥として鴨居陣屋に駐在しており、「源三郎」名義で藤左衛門と書簡のやり取りをしていたものと考えられる。

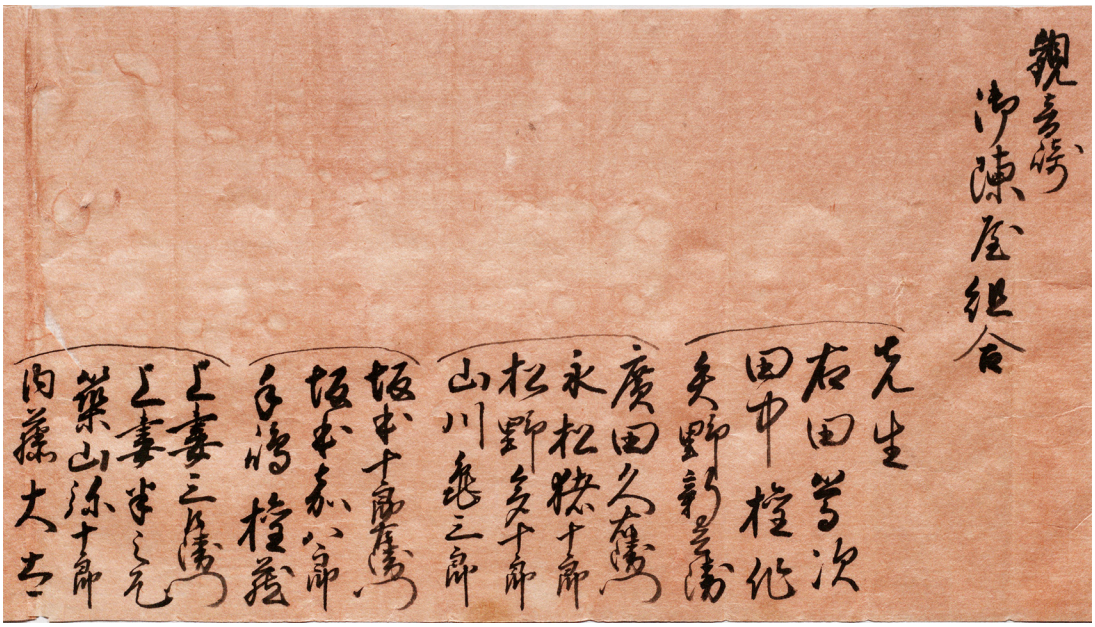
ほか、書簡２点の作成が見られる「大嶋久平」は、砲術師範として派遣されていたとされる大島久平(15)、「斎藤豊太郎」・「服部寛太」・「永山靏平」は全て「〔観音崎御陣屋組合姓名書上〕」に記載が確認でき、鴨居陣屋へ駐在していた家臣であると思われる。

以上の通り、書簡は毎月定例的に書かれているものであり、また書き手として相州警備総帥の長岡監物と思われる人物「源三郎」が書いている書簡が多く、砲術師範の大島久平が書いている書簡もあるなど、当時の相州警備に関わった重要な人物による書簡も含む資料群と言える。



書簡作成者「源三郎」の記名

（「若旦那様近況、アメリカ船5艘渡来」（資料 ID：2200431258））



「観音崎御陣屋組合姓名書上」（資料 ID：2200431288）

３　「右田藤左衛門文書」の内容と特徴

資料群は主に書簡で構成されているが、もう一つの特徴として多くの書簡が藤左衛門へ宛てて、子息の右田熊彦の近況を報告する内容となっているものが多いという点が挙げられる。どういった理由や背景があり、鴨居陣屋を拠点としていた源三郎を筆頭とする人員が藤左衛門へ定例的に子息熊彦に関する報告をしていたのか、詳細な理由は管見の限りでは確認することができなかったが、熊彦の近況報告とあわせて、書簡では現地の状況や警備業務に対する心構え・心境なども綴られている。

書簡を中心とする資料類から読み取ることができる内容としては具体的に①熊本藩の相州警備初期にあたる嘉永７年（安政元年）～安政２年当時における相州警備担当の現地の状況、②異国船への対応状況、③熊本藩士達の現地での生活の様子などが挙げられる。

前述の通り、書簡の時系列は（１）１月～３月頃：江戸への到着報告→（２）３月～ 11月頃：陣屋現地の近況報告、異国船の来航について、御備場の番の交代時期について→（３）10月～ 11月頃：御備場の番の交代や帰国予定に

ついて→（４）翌１月頃:帰国旅程の報告といった内容で推移している。以下、資料の文面をいくつか取り上げながら特徴的な内容を紹介していきたい。

（１）白金屋敷から八丁堀・木挽町への移動

熊本から関東へ派遣された当初の特徴的な出来事として、まず最初に詰所となっていた江戸の白金屋敷から、八丁堀・木挽町へ詰所を移すことが仰せつけられている点がある。

これら江戸での動向については【表１】のうちNo. ２～４の書簡に詳しい。No. ２は、源三郎から「若旦那様」（熊彦の事か）が江戸に到着したことを報告しており、「若旦那様益御機嫌能、去ル朔日江戸白金御屋敷へ被為遊御着座奉恐悦候、乍憚御安慮被遊下候様奉願上候」とあることから、２月１日に熊彦一行が江戸へ到着したことが分かる。しかしその後、No. ３の書簡では「去月朔日ニ白金御屋敷江着仕候乍憚御休意奉願上候、去ル二月十九日先生熊彦様方者木挽丁江引移被仰付、私共拾人・坂本十郎左衛門・財津藤兵衛列三人八丁堀御屋敷江引移被仰付候」と報告されており、２月19日には白金の屋敷から木挽町・八丁堀へと分散して滞在したようである。３月３日作成のNo. ４では熊彦の近況として「若旦那様御別異無御座乍憚御休意被下候様奉願上候、尓今浦賀御出陣無之方々御見物朝夕御稽古御出席まてニ而、私儀大達者無怠相勤居申候」とあり、３月段階では江戸へ滞在し稽古を行っている。

（２）御備場の引き渡し

台場・陣屋などの御備場の引き渡しについては、【表１】No. ７の４月４日書簡で引き渡し前～当日の様子が詳細に綴られている。まず引き渡し当日よりも前の段階として、「先月廿五日辰ノ口御殿へ大筒手不残被召出　御直ニ相州備場ニ遣ス」とあり、３月25日に砲手が御備場へ派遣されている。つづいて「同廿七日より木挽丁御屋敷下より船ニ而相州御備場に被差越、四月朔日諸御臺場御引渡御臺場ケ所ニて猿しま・籏山・十石・観音崎・亀ヶ崎・鳥ヶ崎一同ニ引渡」とあり、３月27日には木挽町に滞在していた熊彦らも船で

御備場へ赴き、そして４月１日に引き渡しが行われた。

引き渡しの際の様子も詳細に記されており、「其日　公儀御役人江川越様より御台引渡し夫より私共三人えは川越様御役人より大筒玉乗共引渡ニ相成、右受取御番へ引移り三日朝飯後迄当番相勤申候、右は熊本御番同様之由ニ在候も御役人様出ニ付而川越様御物頭鉄砲二十挺此方様よりも右同断御警護有之、其外御右筆頭・御右筆・御城使・御留守居・手附大勢之中ニ而受取渡誠にはれの場所、他方之ニ対し何事も不案内ニ而大ニ心配仕候」と引き渡し後に３日朝まで番をしたことや、引き渡しの場は「はれの場所」であったが、一方「何事も不案内」のため心配であるとの心境もあったことが分かる。相州警備が初めてであったゆえの不便や不安については他にも綴られており、警備地の一つであった猿島について「尤島に呑水無之井戸ハ有之候へ共塩水ニ而呑し不申向地より舟ニ而参り申候」と井戸はあるものの塩水が出るので飲めず対岸から船で向かったとあり、さらに「初て事故此方様御役所も取込ニて歟間違多、熊彦様も随分御聞取可有之、尤初て故上より御賄イ被下、三日私共詰内迄賄イ頂戴仕候、乍然飯者有之候へ共椀類無之箸も無之殊之外船便りニ而御役所之取寄失ニ心配仕候」と初めての事で役所も取り込んでいるため間違いが多く、賄いの支給もあったが飯があるものの茶碗や箸が無く全て船だよりで心配であるなど当時の混乱した様子がうかがえる。

（３）異国船への対応

書簡では異国船が来航したことや、相州以外の地域における異国船来航の報告なども確認できる。特に【表１】No.12の書簡では６月17日に小柴沖（現在の横浜市金沢区柴町）へアメリカ船が来航した際の動向について詳しく書かれている。

経緯として、まず「去ル十七日不計異船渡来いたし観音崎沖へ乗入申候間（〇私儀外二三人）物見候て被差定、直ニ御陣屋下より乗船仕」と、観音崎沖へ異国船が乗り入れたことを発見し、陣屋から船で現場へ向かった。その後「此柴と申処観音崎より三里余り御座候処ニ而、右異船ニ駈来公儀御役人ニ

問合申候処、亜墨利加船ニ而軍器等も積込居不申漁船ニ而漂流仁を乗せ参候由亜墨利加より申出候趣、至而無事之由、御役人より聞取、直ニ注進として大津御陣屋へ参り御奉行江右之趣申達引取申候」とあり、小柴沖の現地へ居合わせた役人へ状況を問い合わせ、問題がないことを確認したのちに注進のため大津陣屋へも赴いて伝達を行ったとされている。現地での具体的な警備の様子が記された記録であるといえよう。

（４）現地での生活

御備場の番や異国船警備といった側面以外に、警備という名目ではあるものの熊本藩から相模国へ訪れた一行が現地の様子を報告したり、周辺の観光地へ遊行するなどの様子も見られる。例えば【表１】No.23の書簡では、現地の気温について「此地も暑中者格別之暑も無御坐候処、残暑罷成候程暑サも幾か申候得共、御小屋ニ居り申候得は汗出申候事者無御坐当年者夏者結構と而暮申候(中略)鴨居観音崎之南受ニ而夏者冷く冬之温之由ニ而大ニ仕合ニ御坐候、大津之冬者寒く夏者暑様子ニ御坐候」と鴨居は観音崎の南にあるため夏は涼しく冬は温暖で快適な気候であり、一方でもう一つの陣屋がある大津は夏に暑く冬は寒いようであるなどと報告している。現地の漁業について言及している書簡もある。

現地での観光に関してはNo.19の７月20日付け書簡にて熊彦が７月14日に江の島本宮へ参詣したことが報告されている。No.21の７月21日付け書簡では熊彦の体調不良のため江の島参詣を見合わせたとも記載されており、複数回に渡って江の島への遊行は計画されていたと見られる。その後、No.31の10月21日付け書簡においては、右田格助・右田大四郎・永山靏平父子・重森二郎彦・服部寛太・斎藤豊太郎らが共に鎌倉へ旅行した際の様子が報告されており、また、No.28の10月６日の書簡などでは関東から国元へ帰国する際の計画として、帰路の途中で伊勢・京都へ立ち寄って遊覧してから帰ることなどが述べられている。

遠方からなじみの無い土地へ派遣された熊彦一行であったが、常に警備番

に専念していたというわけではなく、当番外の際にはこういった現地での観光などの時間も過ごしていたことを書簡類から知ることができる。

（５）決定しない交代時期と帰国

そのほか、書簡でたびたび言及されている話題として、熊彦らの交代・帰国時期に関する事項がある。２月頃に関東へ派遣された一行であったが、すでに【表１】No. ９の５月６日付け書簡では伊豆の下田にアメリカ船５艘が来航した事に言及した流れで「右之次第にて御帰国の程も相分不申」といったような帰国の目途が立たないとの記述がある。No.22～23の８月17日、21日の書簡では「扨未タ御帰国之程も御沙汰無之いつれ来春ニ相成可申」および「御備場詰交代之儀も御国許ニ而も未タ相分不申由、此許ニ而も来春之交代と評判仕候」とあり、帰国についての沙汰は未だ無いものの、来春頃には交代になるのではないかとの予測があったようである。翌月のNo.26の９月21日付け書簡では「御帰国之儀も未タ御日限御達ニ者相成不申候得共、不遠中御定日被仰付候様子ニ御座候」とあり、この頃には、交代と帰国についてある程度の目途がついていたようであり、そして翌月のNo.30の10月21日付け書簡で「御番方来月十日前後より被差下候筈ニ御座候、私共も御国許より被差登御人数之着次第交代可被仰付旨御達御座候」とあり、帰国の目途が立った旨を報告している。その後、No.32の11月６日付け書簡では交代がまだ到着せず出立の目途が立たないと述べられているなど予定通りの帰国とはならなかったようであるが、１月には帰国途中の大坂などからの書簡があり、約１年で任期を終え帰国をしたものと思われる。

嘉永７年（安政元年）～安政２年は警備派遣の初年度にあたり、番の交代時期なども定まっていない時期であったため、警備当地においても帰国の時期をめぐる混乱があった実情を読み取ることができる。

おわりに

以上、本稿では、資料群に関わる基本的な事項として、宛先・作成者・作

成時期および御備場の引き渡しや書簡内容に見られる特徴的な事項についてなどをいくつか取り上げて紹介した。熊本藩の相州警備に関しては記録が多く残されているが、海防警備についていた人物による現地からの直接の記録という点で当該の資料群は貴重であると言えるであろう。また、本稿では具体的に取り上げることが出来なかったが、書簡内には海防警備に際しての心境等が綴られている箇所もあり、当時の海防警備に対する藩士層の意識などを知る手がかりともなるのではないか。この点に関しては今後の課題としたい。

【注】

(1)　伊藤好一「大津海岸警備肥後細川家の預所支配」(『三浦古文化』(22)、1977年)。

(2)　浅倉有子「熊本藩の相州警備と預地支配（一)」(『三浦古文化』(35)、1984年、62 ～ 74頁) および同「熊本藩の相州警備と預地支配 (二)」(『三浦古文化』(38)、1985年、52 ～ 61頁)。

(3)　神谷大介「幕末期熊本藩にみる相州警衛の展開と村々取締役頭取永嶋家―海防・海保と預所支配―」(今村直樹，小関悠一郎 編『熊本藩からみた日本近世 比較藩研究の提起』吉川弘文館、2021年、216 ～ 248頁)。

(4)　柴田愛「相州警備における熊本藩の情報収集―熊本藩士萩原隆平の活動を中心に―」(『学習院大学 人文科学論集 26』学習院大学大学院人文科学研究科、2017年、１～ 33頁)。

(5)　経緯の概要については、主に『新熊本市史 通史編 第三巻 近世Ⅰ』新熊本市史編纂委員会、2001年、543 ～ 556頁を参考とした。

(6)　書簡の差出所として、書簡類には「観音崎御陣屋」や「相州観音崎御陣屋」と表記されているものが多いが、当該表記の陣屋は鴨居陣屋を指しているものと推測される。書簡34点のうちには差出所の表記が「浦賀鴨居陣屋」や「鴨居陣屋」とされている書簡も含まれている。

(7)　「御侍帳」(松本寿三郎 編『熊本藩侍帳集成』細川藩政史研究会、1996

年、580頁。）「御侍帳」は永青文庫蔵「慶順公御書出扣　天地人」により作成されたもの。当該の御書出扣は万延2年(1861)3月朔日付の御書出交付の順序を記録したものであり、本稿で検討している時期である嘉永7年前後と直近の時期の記録と言え、記載の「右田藤左衛門」は「右田藤左衛門文書」の人物と同一の者であると推測される。

(8)　「槍術着到」（熊本県立図書館蔵 富永家文書 モトア2272）／本稿において富永家文書の資料に関しては、資料目録『熊本県立図書館蔵 富永家寄贈 武道関係資料 未掲載資料Ⅱ』（熊本県立図書館、2009年）に掲載の内容を参考とした。

(9)　『肥後読史総覧 上巻』鶴屋百貨店、1983年、922頁。

(10)　「若殿様御覧槍術組合附」（熊本県立図書館蔵　富永家文書　モトア2294）。

(11)　『新熊本市史 通史編 第三巻 近世Ⅰ』新熊本市史編纂委員会、2001年、548頁。

(12)　「相州御備場御用一件」（『肥後藩国事史料　巻一』侯爵細川家編纂所、1932年、536 ～ 537頁）。

(13)　「相州御備場御用一件」（『肥後藩国事史料　巻一』侯爵細川家編纂所、1932年、559頁）。

(14)　「相州御備場御用一件」（『肥後藩国事史料　巻一』侯爵細川家編纂所、1932年、478頁）。

(15)　『新熊本市史 通史編 第三巻 近世Ⅰ』新熊本市史編纂委員会、2001年、548頁。